

2021年4月18日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

イザヤ書 30 : 18

ルカによる福音書 13 : 6~9

「実がなるかも」

<悔い改めの促し>

今回は、イエスさまが目の前にいる人々に、「言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」と告げられた御言葉を聞きました。

イエスさまは、教えて下さいました。わたしたちは皆、神さまに造られ、神さまから離れては生きられない者なのに、神さまに背き、離れ、隣人を苦しめている罪人である、ということ。そして、わたしたちの「今の時」は、神さまの御前に向かって歩いている「時」。神さまの裁きがなされる、終わりの日に向かって歩いている「時」である、ということです。

だから、わたしたちは皆、「今の時」、速やかに、神さまから離れてしまった罪を、悔い改めなければならない。神さまの御許に立ち帰らなければならない、ということです。

そしてまさに、イエスさまこそ、わたしたちを悔い改めさせるために、神さまが遣わして下さったお方なのです。

イエスさまは告げて下さいます。この「今の時」に、あなたがたは悔い改めなさい。神さまの御許に立ち帰りなさい。神さまに生かされ、神さまに頼り、神さまと共に歩む者となりなさい。わたしがあなたの罪を代わりに背負うから、と。

前回の、「言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる」という御言葉は、わたしたちにすれば、とても厳しい言葉です。

しかし、これは、罪の赦しと救いへの招きの言葉です。この御言葉は、イエスさまの命を与えてでも、わたしたちに罪の赦しを得させ、悔い改めさせようとする、神さまの決意と愛をもって、語られたのです。

そして、今日のところもまた同じように、わたしたちに、神さまの御許に立ち帰ること、悔い改めることを促す御言葉です。

しかし、今日は、少し違う角度から、「今の時」がどういう時か。神さまはこの時をどう見つめておられるか。イエスさまはそのことを示され、わたしたちの心に語りかけようとしておられるのです。

<いちじくの木>

さて、イエスさまは、いちじくの木のとえを話されました。

ある人が、ぶどう園にいちじくの木を植えていた。ちょっと不思議な感じがしますが、当時はぶどうの蔓を絡ませるために、他の木を植えることがあったようです。

そして、そのぶどう園の主人は、いちじくの木に実がなることを楽しみにしていました。

いつもいつも、実がなっていないか探しに来ていた。ところが、そうしてもう三年にもなるのに、まったく実が見つからないのです。

そこで、ぶどう園の庭の手入れをしている園丁に言いました。「もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。」

ところが、園丁は答えます。「御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。」

もうよくお分かりかもしれませんが、このいちじくの木は、イエスさまと出会い、今その御言葉を聞いている人々。わたしたち一人一人のことです。

そして、父なる神さまがぶどう園の主人であり、わたしたちに悔い改めの実がなること。神さまの恵みを受け止め、生かされ、神さまが喜ばれるような実をつけることを、期待されています。

でも、わたしたちは、中々この神さまの恵みにお応えしていないのです。全然実をつけない。まったく神さまの方を見ようとしません。神さまは、何年も、何年も、わたしたちを見つめ、期待し、待っておられるのに、です。

ここには、三年という一定の期間が出て来ます。これは、いずれ「今の時」が、終わるといふこと。世の終わりの日、裁きの日が来ることを意味しています。そして、実がならない木が切り倒される時がくるのです。

しかし、そこに園丁が現れます。歴史の中で教会は、この園丁をイエスさまご自身であると捉えてきました。

園丁は、主人に対して、いちじくの木を庇って言うのです。「もう少しお待ちください。これまでも手入れをしてきましたが、わたしが木の周りを掘って、肥しもやって、もっと出来る限りのことをやってみましょう。そうすれば、来年は、実がなるかも知れません。いや、きっと実をつけるでしょう。もしそれでもだめなら、その時は切り倒してください。」

園丁であるイエスさまが、いちじくの木であるわたしたちが実をつけるために、出来る限りのことをすると行って下さった。一体、何をして下さったのでしょうか。

それは、イエスさまがご自分の命を捨てて下さる、ということです。

「木の周りを掘って、肥やしをやってみます。」わたしたちが実をつけるために、悔い改めの実を結ぶために、地面に注がれたのは、イエスさまの十字架の血だったのです。

いちじくの木が実をつけるためなら。わたしたちが、悔い改めて、神さまの恵みに生きる者となるためなら。イエスさまは何でもして下さる。神の御子が、低く降ってまことの人となり、苦しみを受け、痛めつけられ、十字架に架かって死ぬということまで、して下さる。

イエスさまは、それほどまでに、わたしたちが切り倒されることを惜しんで下さり、そし

て、イエスさまの罪の赦しを受けて、悔い改めるようになることを信じて下さり、ご自分のすべてを注いで下さったのです。

だから、あなたがたはこの恵みを、注がれた神の御子の命を、しっかりと受け止めて、実をつけなさい。悔い改めなさい。神さまに立ち帰り、神さまに喜ばれる者となりなさい。そう言われているのです。

<実り>

わたしたちは、自分で頑張つて実を結んだり、決意や覚悟によって悔い改めたり、努力して救われたり出来るものではありません。

そもそも、ぶどう園に植えられたいちじくの木が、枯れずに育っているのも、実が期待されているのも、いちじくの木は、ちゃんと最初から神さまによって、成長し、実をつける力が備えられているからであり、また、これまでずっと、主人のぶどう園の中で守られてきたからです。

神さまは、わたしたちを、神さまに応答する存在として、神さまと共に生きる者として、極めて良いものとして、お造りになりました。神さまの恵みに応える者として造られたのです。そして、そのわたしたちが、今ここに存在し、生きてることそのものも、神さまの恵みによるものです。

そして、園丁であるイエスさまが、これ以上ないという程に手入れをし、肥やしをやり、栄養を与えて下さるのです。この恵みを受け入れるならば。その栄養をしっかりと取り入れるならば。木は、ちゃんと実をつけることが出来るのです。

わたしたちには、神さまの愛と、憐れみと、恵みが豊かに注がれていて、神さまと共に生きる道が、目の前に備えられているのです。

でもわたしたちは、自分で成長出来ると言って、与えられる栄養を拒否したり、わざわざ日陰に向かって枝を伸ばしたり、余分な枝を刈り込まれるのを嫌がったりして、素直に与えられる恵みを受け取ろうとしないのです。

それでも、イエスさまは、わたしたちには必ず実りがあると。わたしたちが、必ず神さまの恵みを受けて、イエスさまの手で整えられて、救いに与り、神さまに立ち帰り、豊かな実りを得ることが出来ると、信じて、期待して、待っていて下さるのです。父なる神さまに、「もう少し待ちましょう。わたしがあらゆることをしましたから、きっと実がなります」と、執り成して下さっているのです。

<主人と園丁>

ところで、わたしたちは、このいちじくの木のとえを聞いた時に、もしかすると、こう思うかも知れません。

父なる神さまは、実をつけないわたしたちに対してしびれを切らし、怒り、もう切り倒せと言われた。父なる神さまは、怒りと裁きをわたしたちに向けておられる神さまだと。

でも、イエスさまが待ったをかけて、執り成して、救って下さる。一方で御子イエスさまは、優しいお方であり、味方でいて下さるお方なのだ、と。

そうすると、父なる神さまと御子イエスさまの思いが、まるで違うかのように聞こえるかも知れません。

しかし、そうではありません。御子イエスさまこそが、父なる神さまの御心を、わたしたちに示して下さるお方だからです。

神さまから離れてしまったわたしたちが、切り倒されること、つまり、滅びに至ることは、確かなことです。罪に対して、造り主である神さまが、怒られ、悲しまれ、そして、きちんとお裁きになる。罪を見逃し、放置なさることはない、ということも確かです。

でも、父なる神さまは、わたしたちの滅びを望んでおられない。実をつけて欲しいと、生きて、豊かに実って欲しいと、心から願っておられる。

それこそが、このいちじくの木のとえの「大前提」なのです。

だからこそ、父なる神さまは、御子イエスさまを遣わし、園丁になさったのです。だからこそ、イエスさまの執り成しが、受け入れられるのです。

旧約聖書の時代から、今日読まれたイザヤ書でも、神さまの御心はこのように語られていました。「それゆえ、主は恵みを与えようとして／あなたたちを待ち／それゆえ、主は憐れみを与えようとして／立ち上がられる。まことに、主は正義の神。なんと幸いなことか、すべて主を待ち望む人は。」

どうしてもよい木であれば、たぶん、園丁の執り成しも聞かないで、どうせ何をやっても無駄でしょう、と言って諦め、すぐに切り倒しても良いのです。

でも、そうはなさらない。父なる神さまは、わたしたちがダメなら滅ぼせば良いとは思われなかった。わたしたちに対する愛がある。憐れみがある。期待がある。願いがある。イエスさまによって、きっと実をつけてくれるだろう、との信頼があるのです。三年間も待っておられた方が、もう一年は待てないと、そうおっしゃるはずがありません。

しかも御子イエスさまは、わたしたちが切り倒される代わりに、何でもしましうと。御自分の命をも献げて良い、と言って下さった。

そしてイエスさまは、わたしたちが受けるべき、終わりの日の裁きと怒りまで、ご自分の十字架の上に負って下さったのです。わたしたちに代わって、イエスさまが切り倒されて下さったのです。神さまのわたしたちに対する怒りは、裁きは、もうすべて、イエスさまが代わりに受け止めて下さったのです。

ですから、わたしたちは、もう実るしかないところにいるのです。しっかりと、神さまの愛を受け止め、期待に応え、豊かに実を結ぶばかりなのです。わたしたちは素直に、イエスさまの御声に従いたいです。「悔い改めなさい。神さまの御許に立ち帰りなさい。神さまの恵みを受け、神さまのご支配のもとで生きる者となりなさい。」このお招きに、応えたいのです。

<神さまの期待>

わたしたちは、自分でも自分のことを、もうダメだと思ふことがあるかも知れません。ちゃんと信仰の道を歩めない。神さまの恵みに応える者になれない。そういつて、自分がかっかりしてしまうことがあるのです。

また、わたしたちの愛する人々が、家族が、友が、神さまに立ち帰ることは、きっと無理なんじゃないか。イエスさまを信じることはないんじゃないか。そう思つて、勝手に諦めてゐることがあるかも知れません。

でも、わたしたちは、イエスさまが命を投げ捨てて、わたしのために、隣人のために、すべての人のために、執り成して下さつてゐることを忘れてはなりません。

そして、神さまが忍耐し、わたしたちの實りを、決して諦めておられないことを、知らなければなりません。

終わりの時は、いつか来ます。しかし、まだ来ていません。それまでに、イエスさまがあらゆることをし尽くして下さるのです。恵みを与え、御言葉を語り、十字架によって命を注ぎ、「実がなるかも知れません。いや、きつとなります」と、待つて下さつてゐるのです。

わたしたちは、自分のことも、また周りの人々のことも、神さまが諦めておられないのに。神さまが期待して、忍耐して、待つておられるのに。先に諦めたり、待ちくたびれたり、放棄したりしてはいけません。

ですから、「今の時」、わたしたちもまた、なすべきこと。神さまに心を向け、祈り求めることを、しなければなりません。

そして聖書には、もう一人、三位一体の神、聖霊なる神さまが、わたしたちの弁護者であり、祈りを執り成して下さる方であると、教えられています。求めなさい。そうすれば、父なる神さまが、聖霊を与えて下さると語られています。

ローマの信徒への手紙 8:26 には、わたしたちがどう祈るべきか分からない時にも、聖霊なる神さまが、自ら言葉に表せないうめきをもつて執り成して下さる、と語られています。

父、子、聖霊なる三位一体の神さまが、まさにわたしたちを救いたい、という一つの思いをもつて、愛と憐れみの眼差しでわたしたちを見つめ、働きかけ、導いて下さつてゐます。三位一体の神さまが、忍耐をもつて、期待をもつて、わたしたちが御許に立ち帰り、罪を悔い改め、神さまを礼拝する者となることを信じて、今か、今かと待つておられます。

今の時こそ、わたしたちが御許に立ち帰る時なのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

あなたは、わたしたちをあなたと共に生きる者としてお造りになり、命を与え、恵みを注ぎ、日々養い、守り、導いて下さっています。

しかし、わたしたちはいつも罪に捕らわれ、自分勝手に歩み、あなたを神とせず、あなたの恵みを受け入れず、あなたに喜ばれる実を結ぶことが出来ません。どうぞ、お赦し下さい。

そのために御子イエスさまが、わたしたちの所に来て下さり、ご自分の命を注いで、わたしたちに悔い改めの実を結ばせるため、すべての御業を成し遂げて下さいました。わたしたちは、実なる者とされています。あなたに立ち帰る道が拓かれています。

わたしたちは、聖霊なる神さまを求めます。どうか、聖霊なる神さまが、御言葉をわたしたちに悟らせて下さり、神さまに向かう者として下さり、わたしたちが悔い改めの実を結ぶことが出来るように、救いに与る者となることが出来るように、導いて下さい。

父なる神さまが、わたしたちを諦めず、期待し、忍耐し、もはや怒りの眼差しではなく、愛と憐れみの眼差しをもって、待っていて下さいます。イエスさまがご自分の命を注いで、聖霊なる神さまがうめきをもって、わたしたちを執り成して下さいます。

どうか、今すぐ、御許に立ち帰らせて下さい。

イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン